

紹介

織田武雄監修 中務哲郎訳

『プロトレマイオス地理学』

地図史上、最も大きな影響を与えた著作といえは、クラウディオス・プロトレマイオスの『ゲオグラーピケー・ヒュペーゲージス』であるとする人も多いものと思われる。こ

のたび織田武雄(京都大学名誉教授 監修・中務哲郎(京都産業大学助教授) 訳注)により、本邦初の同書の全訳本が上梓されたことは誠に喜ばしい限りである。わが国ではこの書は従来極く限られた図書館に多くの場合稀覯本として秘蔵されてきた。近年その主要刊本の若干がアムステルダム の Theatrum Orbis Terrarum Ltd. により復刻されているがこれらの原典には近づくに難く、英訳本として E. L. Stevenson, Geography of Claudius Ptolemy, New York 1932 があるが「稀書蒐集家の関心しか惹かなら」自分は何を訳しているのか全然理解してゐない」訳(本書三〇五頁)であり、今日、この全訳書の刊行されたことはまさに旱天に滋

雨といえる。

本書はまず織田武雄教授による「解説プロトレマイオス『地理学』(一―三頁)を巻頭に配している。ここでは同書の科学史、特に地理学史における位置づけと、その内容の概略を紹介するとともに、巻末に収められた一四九〇年刊行ローマ版プロトレマイオス世界図によって、プロトレマイオスの描いた世界像を概観している。

この解説によって読者はこの書の尽きざる興味をも教えられる。例えば単純な地名と旅程や経緯度を示す数値の背後に、西暦紀元二世紀頃、パミール高原を越え「絹の国」セリカへと向うキャラバンの足跡を読みとるとともに、これが『漢書西域伝』や玄奘三蔵、マルコ・ポーロとの関わりで説かれており、一見、著者プロトレマイオスの視野の外にあると思われるわが国と本書が遙かに繋がっていることを教えられる。

またこのシムクロードの行きつく果て、プロトレマイオス世界図の最東北部セリカの首都セラとともたに、内海として示されたインド洋の東岸シナイ人の国の首都ティナイのあることも興味深く、これが南海貿易を通じて得られた中国の首都を示すものであ

るとすれば、セラとの関係はいかに考えるべきかなど、先述のパミール越えが現実にとどの道を通ったかといった問題とともに、本書が多く謎とロマンをも含んだ著作であることも教えられる。

勿論、著者プロトレマイオスの意図はともかくとして、本書の伝えるところが紀元二世紀頃の世界の実像でないことはいうまでもない。それは当時地中海世界最高の頭脳のうちに描かれた世界のイメージにすぎないともいえよう。そのイメージの背後に当時の世界の実像を読みとることこそわれわれの務めであろう。この解説はそのための良きロードブックとなっている。以下本書の目次の順に従って内容の紹介と若干のコメントを記す。

まず「目次」(xi―xv頁)と「凡例」(xvi頁)に次いで本書の中心部をなす翻訳文(一―三九頁)がくる。その底本は「訳者あとがき」による、I―V巻は C. Müller & C. Th. Fischer, Claudii Ptolemaei Geographia, Paris 1883, 1901 VI巻は F. G. Wilberg & H. F. Grashof, Claudii Ptolemaei Geographiae libri octo, Essen 1838―1845 VII巻―IV章は L. Renou, La

Geographie de Ptolémée. L'Inde. Paris 1925. 等が下降して C. F. A. Nobbe, Claudi Polernaei Geographia. Leipzig 1843-45 (Hildesheim 1966) を用いている (ただし vii 卷一四章の数値については最後者による)。

最も信頼すべき Müller の校合が未完に終り、これに匹敵するテキストの現われていない今日においては妥当な選択と思われる。訳者はこの他にもギリシア語写本 (J. Fischer, Codex Vrbinas Graecus 82, Leiden / Leipzig 1932) 一五・一六世紀のラテン語刊本なども参考としている。

第一卷の「総論」(二一―六頁) は二十四の章からなり、地理学と地誌学の相違、地理学的前提としての天文観測の必要性、テュロス(現タイア)のマリノスの著書『地理学』批判、地図作成法(純円錐図法と擬円錐図法)などについて説いている。

第二卷から第七卷第四章までは、当時の既知の世界、即ち西は大西洋上の経度〇度の極楽諸島(カナリア諸島)から、東は前述のセリカの経度一八〇度、つまり地球の半球にわたり、北はイギリスの北方トウン島の北緯六三度一五分から南はエチオピアの輿地アシナムバの南緯一五度に及ぶ広

大な範囲にわたり約八一〇〇地点の経緯度を示し地図作成の便に供している。

第二卷(一七―三八頁)「ヨーロッパ西部の州または総督領ごとの説明」第一章で記載の原則を示す(北から南へ、西から東へ)。次いで第二章ブレッタニアのイウエルニア島(アイルランド)から第一章イッリユリス、すなわちリプウルニアとダルマティアまで。

第三卷(三九―六〇頁)「ヨーロッパ東部の州または総督領ごとの説明」第一章イタリアから第一章クレタ島まで。

第四卷(六一―七六頁)「全リビアの州または総督領ごとの説明」第一章マウリタニア・ティンギタネから第八章内エチオピアまで。

第五卷(七七―九七頁)「大アジアの最初の部分の説明」第一章ポントスおよびビテュニアから第一章パビュロニアまで。

第六卷(九九―一二三頁)「大アジアの第二の部分の説明」第一章アッシュュリアから第二章ケドロシアまで。

第七卷(一二五―二二八頁)「大アジアの最後の部分の州または総督領ごとの説明」第一章ガンジス河の内側のインドから第四

章タブロパネ島(セイロン)までが地名表、第五章―第七章は世界地図の要約、アミラーリ―天球、平面天球図の概要。

第八卷(二九―三九頁)「要約」(第一章―第三章)においては「人間の住む世界」を何枚の地図に分割して描くかについて論じ、それぞれの分図の扱う地域の経緯度を説明することでこの大著を終っている。

次に「訳注」(四一―一五二頁)がくる。

第一卷のそれは古代ギリシア・ローマの地理学史に特に通じていない人々にとって本書を読む上での基礎知識を提供しており、古代地理学史入門としての役割を果たしているが、若干気になった点をあげておこう。

注一 地理学(ゲオーグラビア)と地誌学(コーログラビア)の原義を「地球(世界)を誌す学」「地域を誌す学」としているが「誌す」では文字で記述するというニュアンスが強くなる。グラベインに「描く」という意味のあることに触れると、訳注者が続けてゲオーグラビアを「ここでは『世界地図学』とても訳すべき内容である」と記したことやエラトステネス、プトレマイオスの地理学の本質がより理解され易い注となるものと思われる。

注五 円周の三六〇等分がエラトステネスに始まるとしているのは訳注者が参考書として掲げている(二〇七頁)O. A. W. Dilke, Greek and Roman Maps, 1985, p. 32. Dicksの作図が、D. R. Dicks, The Geographical Fragments of Hipparchus, 1960, p. 148. にあるとこの確証はなごとしておりこれが定説となっている。

注一八 インドのリミニュリケが「ポインティング」に見える Danirike(タミルの國)にあたるか」とあるが、Daniriceとすべきである。

注四二 『アルマゲスト』の手もとになり読者には少々難解と思われる。注七一等のように図があれば容易に理解できよう。注九四 クリマに関する記述で、本文の「15.8」と「1.23」が合わないのは、前者がマリノスの示したクリマであることに起因するものと考えられよう。

第二卷以降の訳注も極めて行き届いてはいるが、校訂上の注記を主としており、地名の比定に関しては特に問題のないものは本文中の各地名の後に()で比定地名を示している。しかし、訳注者はその数を可成り限定するという慎重な態度をとっており、

なお多くの地名を()で示すことができるものと思われるが、その謎解きの楽しみは読者に残されている。例えば筆者曾遊の地イタリアのカムパニア人の町々(三九頁)のうち、クママイ、ミゼノイ、プアテオロイ、ネアポリスには最後者にのみ(ナポリ)と比定地名を付しているが他も(ターマ)(ミゼノ)(ポツォーリ)とすることができ。もっとも全巻にわたり、このような作業を厳密に行なおうとすれば多くの専門家の協力が必要となるであらう。

校訂上の訳注でⅧ巻以降の数値に關し O. Neugebauer, Ptolemy's Geography, Book VII, Chap. 6 & 7, Isis 50 (1959) や P. Schnabel, Text und Karten des Ptolemäus, Leipzig 1939 等により綿密なテキスト・クリティックを行なっていることは特筆すべきものと考え。

次に「索引」(二五三—一九七頁)は三部(約八〇〇項目)からなり、第一の「地名・部族名」は全巻にわたり、カタカナ表記——(意味のある地名試訳)——ギリシア語表記——(現代名、または史上有名な別名)の順で示している。第二には「人名」十三項目を、第三には「物産」二七項目を掲げているが、人名に關しては初出箇處を示すのみである。

この「天文学・地理学用語原語対照表」(二九八頁)においては九二の術語の訳語がその原語のギリシア語とともに示されている。このうち訳注で解説されたものには本文におけるその箇處を付記しているが、その数は残念ながら多くはなく、可照時間帯(クリマ・クリマタ)、気候(クランクス)、州(エパルキヤ)、総督領(サトラペイヤ)、標準時間(クロノイ・イセーメリノイ、ホーライ・イセーメリナイ)、プロキオン(プロキョオーン)だけである。これ以外の注に解説にない語のうちにも説明を要するものがあろうかと考える。例えば擦似河口、天体観測儀。もっともこの表は訳注者の翻訳に対する責任ある姿勢を示すもので、読者への術語の解説を意図したものでないことはいうまでもない。

これらの訳語のうち「アーミラーリ地球」は英和辞典に armillary sphere の訳語として示されているが、他方「渾天儀」というより一般的な用語もあり、これを付記すべきではなからうか。またパラッレロスは確かに「緯度圈」という訳語もあり、

『地図学用語辞典』(日本国際地図学会編 一九八五)にも「見よ項目」として採られてはいるが、「経線」に対して「緯線」というように「千午線」に対しては「平行圈」という術語を用いるのが普通である。字面からは「緯度圈」の方が意味をとり易いであろうが。

次いで Müller と Nobbe のテキストの「章節番号対照表」(二一九—二〇三頁)を掲げ、より専門的な利用に供している。

更に「訳者あとがき」(二〇四—二〇八頁)があり以下のように分けられている。A テクスト(前巻)、B 章節の番号(Ⅰ—Ⅴ巻は Müller の、Ⅵ—Ⅷ巻は Nobbe によったこと)、C 翻訳(既存の訳本五種をその簡単な評価とともに紹介)、D 地名の比定(七種の著作の紹介と本書の比定地名の表記が『グランド世界大地図』(人文社・金教函 一九七八)によること)、E 地図(訳注者の参照した六種の地図類、うち四種はブトレマイオス図)、F 参考書(ブトレマイオスの天文学や地理学に関する文献六種と、その天文書の訳本四種)、G 謝辞。

この書の価値をさらに高めているのは巻末に所載の前述のブトレマイオス世界図「PTOLEMAEUS ROMAE 1490」(二〇九

—二二六頁)である。この図はA系統、即ち世界図一、地図図二六、計二七図からなり、元来 A. E. Nordenskiöld, Facsimile-Atlas to the Early History of Cartography, Stockholm 1889 に複製されたものである。この書は一九七〇年には Kraus のリプツォン版が、一九七三年には Dover Publications, Inc. によりペーパーバックの廉価版が刊行されたため、以前より比較的容易に入手できるようになったとはいえない。この廉価版でさえ店頭で見かけることのが少なくなった今日では、本書への再録は誠に喜ばしい。またこの図は訳注者も述べているように訳書には示されなかった、地名のラテン語表記を知る手段としても利用できる。以上見てきたように、本書は科学史研究における必須の文献であるとともに、世界史上の道標のひとつとして、また偉大な文化遺産のひとつとして貴重な存在であり、本訳書はわが国における斯学の発達に大きな役割を果すことができるものと考えられる。Ⅷ頁左欄上から一六行目の「179度15分」は「179度15分」の、一四二頁注三九の「杭州」は「杭州」の明らかな校正漏れであり、本書の真価を傷つけるものでないことはい

までもない。

末筆になったが、この難解な著作を丁寧な訳注とともに翻訳された訳者を始め、本書を江湖に送るための労を厭われなかった関係者各位に敬意と感謝の念を表する次第である。なお蛇足を記すと、本書の中世イسلام地理学への影響と「アトラビプロス」の著者としての、つまり占星術師としてのブトレマイオスの側面に触れてほしかったというのは望蜀の言というべきであらうか。

(A4判 二八四頁 一九八六年五月
東海大学出版会 二五、〇〇〇円)
高橋正 大阪大学助教授

『井波町肝煎文書目録』

—古文書—

本書は富山県砺波郡井波町に伝わる、近世の町肝煎の文書に近代の町会所・戸長役場等の文書を加えたものの目録である。同文書は現在井波町立図書館に保管されており、未整理分を含めると総点数は四万点と推定されている。そのうち一部は七十年に刊行された『井波町史』下に収載されているが、八十四年に出版された冊子類(触留、